
医

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

医

【Nコード】

N4277G

【作者名】

るつね

【あらすじ】

なぜ助けられなかったのだろう。男は苦悩する……。

なぜ助けられなかったのだろう。

「おじちゃん、おじちゃん」

その声で、ボルゼーは目を覚ます。声のした方に目をやると、少女がいた。何か手に持っている。それをこちらに突き出し、

「これハサミでしょ？」

「……鉗子だ」

「かんし？」

「勝手に入るなと言っただろうが」

くぐもった声で注意するが、少女の耳には届かなかったようだ。メスの入った革箱を手に取りうとしたので、ボルゼーは先に箱を掴み取り、少女の手の届かない棚の上に置いた。

「いやあ」

「いや、じゃねえ。手を切ったらどうする」

「その時は、おじちゃんに治してもらうもん」

純真な瞳がボルゼーを見つめる。思わず、ボルゼーは目をそらした。

「俺に、そんな能力ちからはない」

「うそ。カリハ、知ってるよ。おじちゃんは、『いしや』なんだよね？ 『いしや』は、病気や怪我を治すお仕事なんでしょ？」

「……もう、俺は医者じゃない」
吐き捨てる。

「子殺しのボルゼーさ」

「カリハ、カリハ！」

外から声がした。

「あ、お父さんだ」

ノックもなしにドアが開く。険しい顔をした青年、まだそう言ってもいいくらいの外見をした男がずかかと部屋に踏み込んできた。「困りますね、ボルゼーさん。この前、娘を部屋に連れ込むのはやめていただきたいと言ったはずですが」

「そうは言うがね、カラハリさん。眠っている間に入ってこられたんじゃ、どうしようもあるまいよ」

「せめて、玄関ぐらいには鍵をつけたらどうです」

「見ての通り」

ボルゼーは、適当に手を振って、室内を示し、

「盗まれるようなものもないんでね。ああ、酒があったか」

そう言って、酒瓶を手にして、その中身を汚れたコップに注いだ。琥珀色の液体を、一息で飲み干す。そんなボルゼーを、カラハリは汚物を見るような目つきで見ていた。

「カリハ、帰るぞ」

「えー」

不満げな娘の手を掴み、カラハリは強引に玄関に向かっていく。

ノブに手をかけたところで、振り向き、

「あなたが自堕落なのは勝手ですがね。娘をこんな不健康な場所に連れ込むのはやめてもらいたい」

「はいはい、分かりましたよ、『慈愛の聖僧』さま」

ボルゼーは、へらへらと手を振った。カラハリの表情が、憤怒のそれになる。

「子殺しが」

言い捨て、娘を連れて出ていった。

閉まったドアを、ボルゼーは虚ろな目で見つめている。

「そうさ。俺は子殺しのボルゼーさ」

つぶやき、酒をあおった。

いつの間にか、寝入っていたらしい。外を見ると、すでに夜の帳

が落ちていた。

（おかしいな）

この時間帯にしては、表が騒がしい。窓を開けてみる。二、三人の若者が教会の方に駆けていくのが見えた。

「スイシュ病だつてよ」

その言葉に、ボルゼーの意識は一気に覚醒した。

手が震える。酒のせいではない。

また一人、今度は中年の男が駆けて来た。

「おい」

ボルゼーは声をかける。

「誰がスイシュ病なんだ」

男はボルゼーに問いかけられて迷惑そうな表情を見せたが、根が優しいのだろう、

「カラハリ様の娘さんだよ」

そう答えて、走り去った。

（あの娘が）

よろめいて、ボルゼーはベッドに腰を下ろす。酒瓶に手が伸びそうになるのを、必死でこらえた。震えは、手だけでなく、全身に広がっている。

怖い。怖かった。どうしようもなく。

助けられるのは自分だけだと分かっている。だが、もし失敗したら……。

『見捨てるの？』

少女の声。乱雑に散らかった部屋の中央、一人の少女がボルゼーを見つめていた。

「マルネ……」

ボルゼーは久しく口にしていない娘の名前を呼んだ。

『手術に失敗したから、子殺し。でも、助けられるかもしれないの』

に何もしないのも、子殺しだと思うな』

マルネの言葉が、ボルゼーの心の奥底に熱く突き刺さっていく。

『おじちゃん』

マルネの顔に、カリハの顔が重なった。

『おじちゃんは「いしゃ」なんだよね』

ボルゼーは、ゆっくりと立ち上がる。手術道具を古びた鞆に詰め、よれよれの外套を着込み、ドアノブに手をかける。

「……そうだ、俺は医者だ」

つぶやくと、ドアを開け、教会を目指して走り出した。

教会の周りを囲む人垣を押し分け、ボルゼーは教会の中に入った。
「な、なぜだ。なぜ治らないっ！」

寝室から、カラハリの声。そちらに向かう。

カラハリは寝台に寝かせたカリハの胸に手を当て、呪文を唱えていた。

「主よ、その御力により、彼の者を癒したまえ」

カラハリの両手が淡く光る。が、カリハの様子に変化はない。

異常だった。外傷はない。ただ、その口からこんこんと水が湧き出ている。当然、呼吸はできまい。いつもはくりくりとした黒目がちの瞳も、濁った白眼になっている。

「主よ、その御力により、彼の者を癒したまえ！」

カラハリは再び呪文を唱えるが、結果は同じ。分かっているはずだった。

スイシュ病。唯一、魔法で治せない病気。前触れもなく発症し、患者は絶え間なく水を吐き出すようになる。一千万人に一人かかるかかからないか、といった奇病だ。どんな魔法も、この病気には効果がない。治す方法は。

「主よ！」

カラハリの呪文を唱える姿に悲壮感が漂ってきていた。涙ぐみな

がら、それでもあきらめず、呪文を繰り返す。その肩に、ボルゼーは手を置いた。

「あ、あんた」

「ここは俺に任せちゃくれないか」

ボルゼーは鞆からアンプルと注射器を取り出した。アンプルの中の液体を注射器で吸い上げ、手際よくカリハの腕に注射する。

「む、娘に何をした!」

「応急処置だよ。俺が調合した薬だ。これで少し症状が緩和されるはずだ」

言葉通り、カリハが吐き出す水の量が少しずつ減ってきた。

「さて」

ボルゼーはカリハの肩に手をかける。

「聖堂まで運ぶぞ。あそこが一番清潔そうだからな」

「な、何をするつもりだ」

「手術だ」

「しゅ、手術だと?」

「この病気は臓器の一部が変質して、過剰に水を作り出してしまう病気だ。それを取り除く」

「取り除く、だって?」

「ああ」

「まさか、腹を切るのか?」

「そうだ」

「馬鹿げてる!」

カラハリは青ざめた顔で叫んだ。

「腹を切り裂き、臓器を取り除く? そんな、そんな野蛮な真似、私は許さないぞ!」

「そんなことを言っているから、この病気はいつまでも奇病なんだ。ちゃんと原因も治療法もある。魔法では治療が不可能だというだけだ」

まだ何か言おうとしたカラハリの胸倉を、ボルゼーは乱暴に掴ん

だ。

「お前も『子殺し』になりたいのか？」

「く……お前こそ、自分の子供だけでは飽き足らず、他人の子供まで殺めるつもりか」

ボルゼーの表情が曇る。手の力が緩み、カラハリの胸倉から離れた。

やおら、ボルゼーは膝をついた。

「頼む」

手も、額すら地面にこすりつけ、懇願、そう懇願をする。

「助けさせてくれ」

その声は震えていた。

「俺に、娘を助けられなかった贖罪をさせてくれ……頼む」
カラハリが呆然として、その様子を見つめている。

なぜ助けられなかったのだろう。

コンプレックスがあった。子供の頃から、傷病人を助けたいと思ってきた。十五の時だったろうか。自分に魔法の才能がなく、僧侶にはなれないということが分かったのは。仕方なく、本当の意味で仕方なく、医者になった。だが、僧侶になれなかったというコンプレックスは、むしろ大きくなった。病人も怪我人も、皆、教会の僧侶を頼る。医者を頼るのは、よほどの変人か、後ろ暗い過去を持つ者ぐらい。皆を、見返したかった。

娘のマルネがスイシュ病にかかった時、不安より喜びが勝っていたことは否定できない。魔法では治せない病氣、これを完治させれば……。

手術は失敗した。教会にも相談せず、自分の娘の腹を裂き、あげく死なせてしまった男。

『子殺し』。

妻は出ていき、ボルゼーは酒びたりになった。酒によって作り出された泥濘でいねいに沈みながら、常に頭のどこかで、スイシュ病のことを

考えていた。あそこで、もっと上手くやっていれば、あそこで、冷静に対処できていれば。

二十年。

ボルゼーは、ずっとスイシュ病と闘ってきた。

「私は、神職から辞することにする」

娘を抱いて聖堂に向かう途中、カラハリは言った。

「このような不浄の選択をした私を、神はお許しにならないだろう」
ボルゼーは無言のまま、カラハリについていく。

「だからこれは、『慈愛の聖僧』ではなく、一人の父親としての言葉だ」

カラハリは足を止め、振り向くと、カリハの身体をボルゼーに向けて差し出した。

「助けてくれ、娘を」

「任せろ」

ボルゼーはカリハの身体を受け取り、力強くうなずくと、ゆっくり聖堂に入っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4277g/>

医

2010年10月8日15時50分発行